



明太子



川崎ゆきお

「梅子」

「はい」

「明太子がないようだが」

「身体に悪いようですから」

「いや、あれは毎日食べるものなんだ」

「誰が決めたの」

「いや、だから、そういう習慣なんだ」

「血圧が上がりますよ」

「じゃ、普通のタラコでもいい」

「そう言うことじゃないの。贅沢なのよ。毎朝毎朝じゃ高く付くんだから」

「辛子明太子は私の唯一の楽しみなんだ。昼はいい。明太子を食べることが私の生きがいのようなものだ。昼はいい。我慢している」

「煙草もやめないし」

「我慢して本数減らしているよ。しかしこれは逆に増やしてしまう。これはニコチンが切れると駄目なんだ」

「コーヒーをよく飲むし、しかも缶コーヒー、高いのよ。それに空き缶捨てるの大変なんだから」

「カフェインが切れると体調悪くなる。死んだようになる」

「お酒を飲まないだけましだけど」

「そうだろ、だから明太子ぐらい朝夕出してくれよ」

「他が節約出来ないのなら、明太子しかないでしょ」

「明太子斬りか」

「食べなくても生きていけるわ」

「しかし、人には楽しみが必要だ。明太子がないと、これから先、味気ない人生になる」

「大袈裟な。最近じゃない明太子食べ出したの。私を買ったのがいけなかったんだけど」

「しかし、君は上着をよく買うねえ。コートもだ。あれはいいのか」

「だって、腰が痛くて」

「腰と、着るものとの関係するのかね」

「整形外科へ行ってるのよ。週に二回」

「それが何か」

「だからァ、同じもの毎回着て行けないでしょ。コートだけじゃなく、中に着る服も、いつも同じじゃ恥ずかしいわ」

「それは節約出来ないのかね」

「出来ないわ」

「そうか、しかし本当に腰が痛いのか」

「何てことを、痛いから通ってるのよ。今も、こうして話しているだけでも痛いよ。声を出すとき腰に響くし」

「長いじゃないか。治療が悪いんじゃないのか」

「マッサージして貰うと元気になるの。翌日ましになってるし」

「まあ、腰痛は仕方がないにしても、着る服がそんなに必要なのか」

「まあね」

「あそこの整形、僕も行ったことがあるが、若いリハビリの先生が何人かいるねえ」

「だから、恥ずかしい格好で行けないのよ」

「そうか」

「それより、あなたのお母さん、何とかならない」

「何とかとは」

「近所に住んでいるから、たまに顔を合わすのよ。着ているものがねえ」

「僕もそれで、誕生日に服をプレゼントしたことがある。外出着だ。というより医者行きの服だ」

「知ってるわ。明るいプリント柄の」

「しっかり、着てくれているんだ」

「でも、ずっとあれよ」

「しかし、前よりはいいだろ」

「一寸派手すぎるんじゃない」

「あれしか着ていける服がないんだ。いつもは割烹着だ」

「見習いたくないわ。着せ替え人形のように、色々なのを着る楽しみがない人よ」

「そうじゃない。節約してるんだ」

「じゃ、あなたも明太子、もういいでしょ」

「分かった」

「良かった」

「自分の小遣いで買うのなら、問題はないだろ」

「そんなに明太子がいいの」

「ささやかな楽しみじゃないか」

「じゃ、自分でスーパーで買ってきなさいよ。自分のお金で。高いことがよく分かるから」

「ああ、覚悟の上だ」

了